

私、履歴書

もろい はな え
森 英 恵

②

歩いて、この目のために和服地の洋服への応用に取組んで来たし、日本よりの進んで来た既製服のサイズ分けを修得するために、アトリエの技術者をサンフランシスコのファッション学校に送り込んだりもした。

初の海外コレクションの会場は、ニューヨークのパークアベニューにある有名なホテル・デルモニコだった。開演前、舞台の裏手でモデルに着つけをしていた私は、この先どんな事態が起こるのやらまったく予想もつかず、まさに寒をつかむような心境だった。

すべて「日本製」で臨む

「田舎のチヨウ」世界へ飛躍

NYデビュー

高いステージの周囲にはモデルがずらりと並んでいる。大勢のプレスや着飾った服飾関係者が会場は埋め尽くされた。「MIYABIYAKA」。ショーのパンフレットには、平安時代の雅びにモチーフをとった私のテーマが、ローマ字で題されていた。

忙しき準備に追われながらも、みんな緊張感から、口数が少ない。私

メリカ人に、はたして通じるだろうか……。不安が胸を締めつける。そんなときはまた自分に言いかけた。力不足なのはしょうがない。でも自分なりにここまで一生懸命走ってきたのだ。今さらじたはたしてどうする……。

実際、それまでにできることは自分なりに精一杯してきた。二年前から京都の西陣とか滋賀の長浜といった布地の産地をあちこちらたすね

とモデルたちが歩き出していく。彼女たちの何人かは、パリからニューヨークへ駆けつけてくれた日本人モデルだ。ピエール・カルダン専属の松本弘子さん、クリスチャン・ディオールと専属の契約をしていた松田和子さん、イブ・サンローラン

の所で働いていた高島三枝子さん。いずれも私たちがデザイナーよりもひと足早く国際舞台で活躍を始めていた大切な仕事仲間だった。海外の大

舞台を初めて踏む私にとって、こんな心強い味方はなかった。やがて少し離れた会場から拍手が聞こえてきた。着替えるのために薬座に戻ってくるモデルの表情がなかなかになっている。「先生、うまくいってるわよ」。美しい彼女たちが声を



初のニューヨーク・コレクション (1965年1月)

スとフィナーレに近づくとつれて、会場のように大きくなっていくようになった。ドレスには大きな蝶々（ちよう）が舞っていた。前にニューヨークで見たオペラ「マダム・バタフライ」の哀れな蝶々夫人のイメージを吹き飛ばそうと、大胆にデザインしたコレクションだった。日本の女を眺める当時の欧米人に対する私の主張が、さうそうと羽を広げる蝶の形になったのだ。

フィナーレがやってきた。私のいる薬座にも、割れるような拍手が響いた。モデル全員が興奮した面持ちで戻ってきた瞬間、涙があふれてきた。ふだん泣くことなんてないのに、あの時はやはり、ポロポロと涙が流れた。

二十九年前の雪の日のニューヨーク。なにかを一つ乗り越えた日だった。それはまた、ふるさと島根の片田舎に飛んでいた紋白蝶が、世界へとはたたくきかけとなった日でもあった。(ファッション・デザイナー)